

第30期目録委員会記録 No.13

第13回委員会

日時：2006年6月24日（土）14時～17時

場所：日本図書館協会5階会議室

出席：永田委員長，荻原，鈴木，平田，古川，横山，渡邊
<事務局>磯部

[配付資料]

1. 典拠コントロールの現在：FRARとLCSHの動向 [情報の科学と技術 56(3) 2006 p108-113] (6ページ-A4, 渡邊委員)
2. FRAR Worldwide reviewについて：FRBRメーリングリストでの遣り取り (6ページ-A4, 横山委員)
3. ALAによるRDA第1部案批判の要旨 (4ページ-A4, 古川委員)
4. 第30期目録委員会 [名簿] (1ページ-A4, 事務局)

[検討事項]

1. FRARについて

渡邊委員より配布資料1に基づき、FRARについて説明があり、以下の意見が出された。

- ・ 実体が同じで2つ以上の名前を持つ時、「を見よ参照」の場合と「をも見よ参照」の場合があるが、典拠レコードとしてどのように採用するかはそれぞれの規則に依存しているようである。
- ・ 標準番号については扱わない方針になっているようだが、扱わないのなら理由を示して欲しい。
- ・ 識別のために一定のコンセプトで番号のようなものを振り、情報は混濁するような形でも機能すれば良いという考えのようである。
- ・ FRBR的なアプローチはなされておらず、現行の典拠作業の慣行をモデル化しているようである。

横山委員より配布資料2に基づき、FRBRメーリングリストでのFRARについての遣り取りについて説明があり、以下の意見が出された。

- ・ 図書館コミュニティ以外も意識して作成されているようである。
- ・ NCRとの照合が必要で、第7章のp48-52にある”Table 3: Mapping of Attributes and Relationships to User Tasks”を分析してみる必要がある。

2. RDAについて

古川委員より配布資料3に基づき、ALAによるRDA第I部案批判について説明があり、以下の意見が出された。

- どこまでを標準として、どこからをapplication profileで扱うかは難しい問題である。
- エリア・エレメント構造の意味が薄れていて、MARC作成におけるコード化を目録作業として行っているのならば、コード化情報を規則に取り込むことも考えられる。
- 表現形は体现形の括りの単位である構成概念と考えることもできる。

次回の委員会でRDA案の第6,7章を荻原委員と平田委員でレビューすることとした。

3. その他

- NACSIS-CATの書誌レコードに主記入フラグがどのくらい付いているかを和洋別に調査することとした。

次回以降の委員会の予定

7月22日（土）14:00～

9月2日（土）14:00～

以上